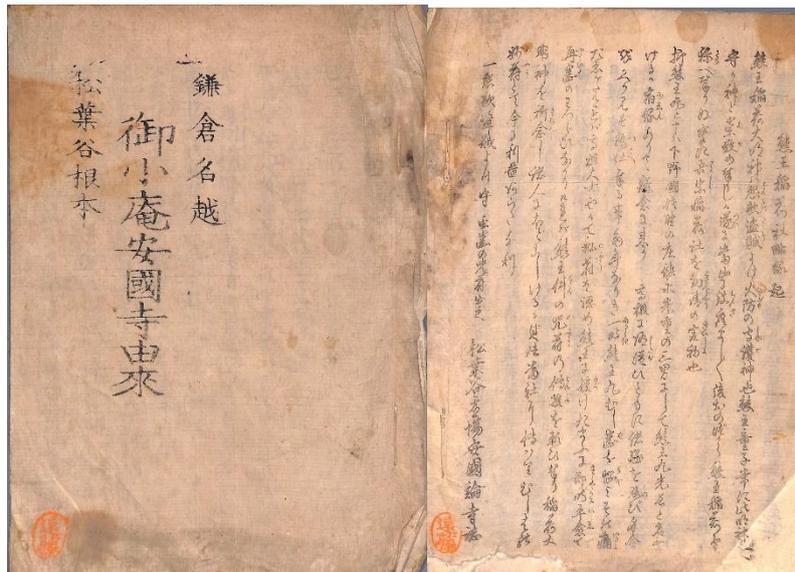


小展示 Vol.3

川崎市公文書館所蔵資料から見る江戸期の観光客

～「御小庵安国寺由来」から『熊王稲荷社略縁起』を読み解く～



表表紙

裏表紙

【日蓮の生涯】

日蓮は承久4年(1222)に安房国で誕生し、天福元年(1233)12歳の時に清澄寺に登った。その後、延応元年(1239)には18歳にして鎌倉にて浄土宗・禅宗を修学し、仁治3年(1242)比叡山に登り、建長5年(1253)には日蓮と名乗り、法華経を説き始める。文応元年(1260)には「立正安国論」を著し、この時39歳であった。弘長元年(1261)には伊豆へ流罪となり、文永8年(1271)には佐渡へ流罪となった。文永11年(1274)2月、佐渡流罪を赦免され鎌倉に戻り、弘安5年(1282)身延を出立し常陸を目指すが、10月13日、武蔵国池上で入滅した。61歳であった。以上が史実上の日蓮の生涯である。

【「御小庵安国寺由来」に見る日蓮のエピソード】

「御小庵安国寺由来」には、日蓮が鎌倉松葉ケ谷で「立正安国論」を記し当時の政権に呈して流罪になった受難のことや、日蓮の霊験がいかに強力なものであったかを日蓮の教えの正しさを主張するものとして当時の様子を著者がまるで実際に見ていたかのような臨場感を持たせて各々のエピソードを収録している。

【「御小庵安国寺由来」発行の真意～「熊王稻荷社略縁起」と江戸の観光客】

最後に「御小庵安国寺由来」の内容をおさえた上で、最後の頁に記されている「熊王稻荷社略縁起」の翻刻を参照されたい。江戸時代には民が参詣旅行に行くのは当たり前に見られた光景であった。各寺社は、誰もが知っている昔の物語を引いてきては、観光客を惹きこむような魅力的な由来を略縁起として記し、木版刷りで分けたのである。そんな中、おそらく寄贈者の先祖が鎌倉観光へ行ったのであろう。むし歯に効力がある現世利益と共に「熊王稻荷社略縁起」という霊験あらたかな物語を旅の友として持ち帰ってきて、それが今川崎市にあることが推測できる。そして、「御小庵安国寺由来」発行の真意とは、「熊王稻荷社略縁起」を世に流布するための前提のような存在であったことが窺える。「熊王稻荷社略縁起」では、日蓮に付き従い、「御小庵安国寺由来」でも登場する熊王丸が虫歯を患い、日蓮の秘符によって劇的に回復する現世利益が説かれている。熊王稻荷社の前身は元々盗賊除け・火防の守護神であったが、日蓮と熊王丸の由緒が追加されたことで、ますます観光客に人気の観光地となったのであろう。

【翻刻】

熊王稻荷社略縁起

熊王稻荷大明神は怨敵盗賊よけ火防の守護神也熊王童子常に此明神

守り神と崇敬め奉りしか遂に当山に鎮座ましく後おのづから熊王稻荷と

称へ奉りぬ実に吾宗稻荷社を勧請の最初也

抑熊王丸と申は下野国佐野の庄徳永光重の三男にして熊王丸光長と名乗

けるか宿縁ありて鎌倉に來り 高祖に随従ひともに諸難を忍び身命

をかへり見ず給仕奉る事当年なりき一時熊王丸むし歯を悩みそれ痛

たゑがたけされば高祖大士やかて秘符を認め熊王に授けたまふに即時愈て

再 齒のわつらひなかりければ熊王件の呪符の伝授を願ひ奉り稻荷大

明神を祈念し諸人にほどこしけるか其法当社に伝はりむしはの

秘符とて今に利益あらたなり

一 怨敵盗賊よけ守 虫歯の呪符出之 松葉谷霊場安国論寺誌

(所蔵印)